

国語

〔共通問題〕

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

クイズ番組の決勝戦での出来事を描いた小説『君のクイズ』に次のようなシーンがある。主人公の三島玲央（1）が過去に出場したクイズ大会で、かつて同棲どうせいしていた元カノと観たアニメの問題に正解する。三島はそのときのことを振り返りながら、クイズと人生についてのひとつの立場を表明する。

僕が桐崎きりさきさんと出会っていなかったら、彼女と同棲をしていなかったら、僕は『響け！ユーフォニアム』の問題に正解することはできなかった。

クイズが僕を肯定してくれていた。君は大事なものを失ったかもしれない。でも、何かを失うことで、別の何かを得ることもある。君は正解なんだ——クイズが、そう言ってくれているみたいだった。

（小川哲『君のクイズ』）

三島は、かつてのパートナーとの生活で得た知識——「クイズで勝つため」の努力とはまったく関係のないところで得られた知識——によって勝ち取った正解が、それがどんなものであるにせよ、自分のこれまでの人生を肯定してくれているように感じている。

僕にとってクイズをすることの一番の魅力は、クイズが僕の人生を肯定してくれることにあった。どんな人生であれ、それが間違いではなかったと背中を押してくれることにあった。（同書）

クイズが人生を肯定する。ここに、いま私が考えてみたいひとつの立場が表明されている。クイズが人生を肯定するとは、いったいどういうことなのか。なぜ、クイズにそんな力がヤド（2）るのか。それを考えてみたいと思っっている。（中略）

この世界の事実を切り取っただけの知識。それが「クイズ」という形式——後にも述べるが、これは「テスト」ではダメなのだ——で問いかけられた瞬間、それは私たちの人生まで巻き込んだエンターテインメントになる。クイズと自分の人生が交錯する瞬間、そこで勝ち取った正解はゲームの勝ち負けを超えてあなたの人生さえも言祝ことばぐ。でも、どうして？

人生を巻き込むエンターテインメントとしてのクイズについて考えるために、もうひとつ例を挙げてみよう。高校のクイズ研究会を題材にし

た杉基イクラのマンガ『ナナマルサンバツ』の主人公・越山識もまた、クイズに正解する喜びを、単純な勝ち負けではなくクイズと人生が交錯する瞬間に見出している。

高校に入学したばかりで、好きなことはひとりで本にポットウすること。そんな識には、どんな部に入部するかのテンポウもなかったのだが、たまたま新入生向けの部活説明会で行われた早押しクイズに参加することになる。クイズ経験者の早押しにアットウされながらも、早押しクイズの奥深さに心を惹かれていく識の指は、次の問題の冒頭——「恋をしたのだ。そんなことは、全くはじめてであった」——が聞こえた瞬間に誰よりも早く動いていた。

『ダス・ゲマイネ』——太宰治のマイナーな短編小説のタイトルだ。戸惑いながら絞り出した解答を、「ピューン」という正解のSEとオーディエンスの拍手が迎える。それは、彼がひとりで本と向き合い続けた孤独な日々への祝福のように響きわたった。ボタンを押して正解する気持ちよさを知った識は、「競技クイズ」と呼ばれる世界にのめり込んでいく。

その面白さを誰とも共有できない、うんちくをたれても誰も見向きもしない知識が、クイズとして出題されるだけで、みんなの注目を集めながら「正解」と言ってもらえる武器になる。その喜びを原動力にクイズに打ち込み続けた識は、「自分が誰かのクイズに正解できたり僕のクイズに誰かが正解してくれた時——「みんなの世界と繋がった!」って瞬間が好きです!」とクイズの魅力を語る。識にとってクイズは、これまで自分のなかで楽しむしかなかった知識を人と繋がるものに変えてくれる「最高のコミュニケーションのツール」なのだ。自分の人生のなかで得た、なにかの役に立つとは到底思われない知識が、他者との繋がりを感ぜられるものになる。つまり、クイズが人生を肯定するというのは、クイズが自分の世界と「みんなの世界」を繋げてくれるということなのだ。

「みんなの世界」と繋がること。クイズが持つこの側面は、『君のクイズ』のなかでも強調されている。そこでは、クイズにおける解答者の対極の存在、つまり出題者にも光が当てられている。

ここまでの議論を振り返ろう。「競技クイズ」を題材にした『君のクイズ』や『ナナマルサンバツ』といった作品で描かれる、クイズをする喜びの源泉。それは、クイズを通じて解答者の世界と出題者の世界が重なり合うところにある。クイズは、まったく異なる人生を歩んできた私たちが、たまたま同じ知識を、同じ経路で、あるいはまったく異なるきっかけで得たことを、教えてくれる。

出題者と解答者の世界が重なり合っていることをクイズが可視化する。この側面をもっともセンエイ化させると、特定のジャンルのマニアックな知識を出題し合うカルトクイズのようなものになる。だが、一般的なクイズ番組のように出題者の存在が前景化されていなくても、私たち

はクイズに正解し、自分の人生を肯定されたような気分になることができる。それは、ここで言われている出題者の世界というものが、それに正解することによって世間一般から評価されるような公共的な知の領域として考えられているからだ。たとえば、『平成教育委員会』や『Qさま!!』^(注3)のようなクイズ番組が「学校」というモチーフを強調しているのも、出題者の世界をこの公共的な知の領域に固定する役割を果たしている。

顔の見えない誰かが「これは知っておいてよい」「これは知っておくべきだ」といった意図で出題したもの、それを私は知っている。「早押しボタン」という舞台装置を介して、自分の人生が公共的な知と接続される。そして、私と世界が繋がる感動的な場面を「ピンポン」というファンファーレが祝福ののだ。初めてクイズをやった人が、運良く自分の得意な分野で正解する経験をすれば、のめり込んでしまうのも無理はない。クイズにはこのように、人生を肯定される喜びをもたらす側面がたしかにあるのだ。

クイズは人生を肯定する。大なり小なりそのような喜びをもたらす娯楽であることには、^(注4)ネガティブな面も存在する。私たちの人生にまで踏み込んでくるクイズは、私と誰かの繋がりを可視化するものである反面、私と「みんな」の断絶を突きつけるものでもある。

たとえば、自分の人生との結びつきが強い正解を追い求めていくことは、自分の過去の救済であると同時に、^(注4)文化資本を誇示する行為、他者へのマウンティングという側面も併せ持っている。専用の学習によってではなく、ふだんの生活のなかで獲得した知識の競い合いをクイズと捉えたとき、クイズの出来が「人生の [A]」のように感じられる瞬間がある。クイズが「正解できるワタシ」と「正解できないワタシ」を選別する。それが「努力の差」ではなく「人生の差」として点数化されかねない。それがクイズに参加するひとを傷つけることがある。

日本テレビ系列のクイズ番組『高校生クイズ』で二連覇を達成し、現在は YouTuber・テレビタレントとしても活躍する伊沢拓司^(いざわたかし)は、「クイズの持つ「暴力性」と、その超克」と題された論考のなかで、自身が学校をまわって実施するクイズイベントの困難を次のように振り返っている。

クイズは多分に分断的な要素を持つ。正解と不正解、勝ちと負けが明確なエンターテインメントだ。しかも、それが日常生活と強く結びついている。知っている／知らないは、これまでの人生経験だったり、学校教育だったりとの関連性が高いように見え、ともすると誤答により人生を否定されるような気持ちになりうる。「……」

そして、競技クイズはその「暴力性」を楽しむ競技、という側面を持つ。

(伊沢拓司「クイズの持つ「暴力性」と、その超克 いかにしてクイズ文化を理解してもらおうか」)

伊沢はここで、クイズが誰かの人生を勝手に否定してしまう構造を持つことを指摘している。クイズの題材は多くの場合、時事ニュースや最近のトレンド、学校で習う基礎教養的な知識から採られる。それはもちろん、参加している誰かしらは正解できる可能性が高い問題を作るため

の配慮でもあるのだが、そのような気遣いがむしろ、正解者とは違って「正解できない・知らないワタシ」を浮き彫りにしてしまう。重要なのは、この暴力性が、クイズの悦びの源泉にもなっているということだ。人生を肯定される快樂と人生を否定する暴力性は、クイズという同じコインの表と裏なのである。

クイズにはもうひとつ、解答者同士の知識の比較ではなく、出題者の世界と解答者の世界の繋がりを可視化するという側面があった。そして、クイズで出題される知識には、その知識の知名度や出題したときの面白さといった意味での序列があり、共同体に特有のバイアスがある。

裏返せばそれは、「クイズ王」的な能力や評価は特定の文化圏に依存したものになっている、ということだ。たとえば、仮に海外にも日本と同じようなクイズ番組やクイズ大会の文化があったとして、日本でクイズ王として知られる伊沢拓司が、アメリカやヨーロッパで同様の活躍をすることは難しいだろう（依然として、物知りという評価を受けることはできるかもしれないが）。これは、フットボールの世界ではジリーグと海外プロリーグのあいだにレベルの差があるとか、プロリーグ毎に戦術のスタイルが異なっているから順応が難しいとかそういう次元の話ではない。クイズが強い、あるいは物知りとして評価されることは、甚だしく文化圏に相対的な現象なのである。それは、クイズがその悦びと暴力性の源泉としている公共的な知というものが、文化圏に相対的な枠組みであることに由来する。

ここで少しだけクイズから離れて、公共的な知識をめぐる相対性の経験について考えてみよう。採りあげるのは、日本の文芸批評家・江藤淳のアメリカ滞在の記録である。江藤は、ロックフェラー財団の연구원として一九六二年から一九六四年にかけてアメリカに滞在していたときの報告を『アメリカと私』というタイトルで出版している。

この本が江藤の単なる活動記録ではなくアメリカ文化論たりえた要因として、彼がこの本のなかで見出した「焦点」という視座を挙げることができる。アメリカ生活のなかで大量に浴びる新鮮な情報から価値づけられた知識を獲得するために、そして、そこで日本人として生きていくために、⁽⁶⁾江藤はひとつひとつの出来事の価値を見極めて遠近法的に位置づけるための焦点を見つけ出さねばならなかった。江藤による焦点をめぐる考察は、クイズを通じて私の世界とみんなの世界の重なり合いについて考える私たちに重要な洞察をもたらしてくれる。

『アメリカと私』のなかで江藤は、アメリカにおいて異邦人として生きていくことがどういふことを認識するきっかけとなった出来事をいくつも報告している。そのなかに、日本とアメリカ、それぞれの知的階級がどんな知識に価値を見出すかについてのズレを実感するエピソードがある。

私は、たとえば、ウィリアム・デイン・ハウエルズという作家の文学史的な位置が、かねて想像していたよりも格段に重要なものであることを知った。ハウエルズは、来る途中ワシントンで三日間泊めてくれた別の米国人の友人宅のパーティーで顔を合わせた若い外交官の祖父であった。そういえば、この外交官が、William Dean Howells, Jr. という名刺をくれたとき、妙に、てれたような顔をしたのも、無理は

なかったのである。しかし、それは知識であった。私が求めていたのは、一方、知識に焦点をあたえてくれる「発見」とでもいうべきものであった。

（江藤淳『アメリカと私』）

(a) ウィリアム・デイン・ハウエルズがどんな作家なのか、いまは重要ではない。この引用で注目したいのは、文芸批評家であり英米文学にも造詣が深いと思われる江藤が、生活のなかで出会った知識から疎外されているように感じていることだ。このときの江藤には、自らの生活と文学史を直結させてくれるような知識も魅力的なものとは到底思われぬ。なぜなら、江藤はまだそれらの知識の価値を測るための「焦点」を見つけられていないからである。

このような江藤の感覚は、私たちの生活と知識の結びつきについてひとつの洞察を与えてくれる。知識は、それが他の知識と比べてどんな意義を持っているのかを見極めるための焦点がなければ、ただの情報でしかなく、私たちの興味を引くようなものにはなりえない。目の前の若い外交官が高名なハウエルズの孫であるという情報は、おそらく英米文学史にあるていど通じた人間にとっては魅力的な知識なのだろう。だが、それが魅力的な知識になりうるのは、彼らがあらかじめ米国社会や英米文学史についての一定以上の理解を備えているからである。私たちは、単なる情報と魅力的な知識をわけると焦点の存在をふだんあまり問題にしない。似たような文化圏や共同体においては、どんな情報がひとの興味を唆るものであり、どんな情報がそうでないかのシビョウが前景化することはほとんどないからである。ところが、日本からアメリカへと、言語も歴史も文化も大きく異なる環境に身を移した江藤には、この焦点の不在がはつきりと感じられたのだ。

江藤は『アメリカと私』のなかで、アメリカという国の焦点を見出すきっかけになった事件をいくつも挙げている。初のアフリカ系アメリカ人の入学者（ジェームズ・メレディス）をめぐるミシシッピ大学で勃発した暴動とそれにもなう流血事件の報道や、ジョン・F・ケネディ暗殺によってひっそりと静まりかえった町を目の当たりにした江藤は、人種間の闘争や大統領という地位と役割の存在感といった、アメリカ社会をかたちづくる生々しい部分を生活者として再発見することになる。焦点が単なる知識の枠組みではなく、生活する人々の思想や価値観の根本に関わるシリアスな問いとして提出されていることは——この論考の主題ではないが——頭に入れておくべきだろう。私たちが「知識」というくくりでいったい何を採りあげ、何を捨象してしまっているのか。それは私たちの生活に関わる B 的な問題なのだ。

この論考の本筋に戻ろう。「焦点」をめぐる江藤の洞察は、クイズについて考えてみるときにも有効だ。クイズとは——テストとの差異を強調するならば——自分が見つけた魅力的な情報を知っているかどうか、相手に問いかけ、シェアする営みだと言える。問う者と問われる者のあいだには、どんな情報に魅力を感じるか、どんな情報が意義深いものであるかについての理解が共有されていることが、クイズをとともに楽しむための条件となっている。そこで問われるのは、フラットに俯瞰した森羅万象についての情報ではない。より重要でより魅力的な情報についてのコンセンサス。これが江藤の言う焦点であり、それは出題者と解答者がともにクイズを楽しむための条件でもあるのだ。

焦点が共有されていないために、ウィリアム・デイン・ハウエルズの孫が見せた「照れ」は江藤にはまったくピンとこなかった。共通の知識を持つてはいても、二人の世界はこのとき、まったく重なっていないのである。私たちの関心に引きつけて言い換えれば、どんな知識をクイズとして出題したら面白いのか、というコンセンサスから自分が排除されていることをこのとき江藤は感じとったのである。

どんな情報に価値を見出すのか。クイズを出題するという行為は、なんらかの価値体系を陰に陽に参照して行われる。出題者の世界と解答者の世界が重なり合ったとき、自分たちの人生が肯定されたかのように感じる。私の生は、この「正解」で誰かと繋がったのだ、と。「人生を肯定するクイズ」の喜びは、単に知識が共有されていることを確認するだけではまだ得られない。その背後にある、より重要でより魅力的な情報についてのコンセンサスが取れていること、つまり焦点の共有まで可視化されることが、クイズ的な喜びの条件になっている。江藤のアメリカ滞在記を補助線にすることで、私たちの人生とクイズの関係をこのように整理することができるだろう。

しかしながら、クイズが持つこのような特徴は逆説的に、自分と社会の断絶までも可視化してしまうことがある。正解によってクイズは人生を肯定してくれる。しかし、同時に、お互いの世界がまったく重ならないことさえも、クイズは明らかにしてしまうのだ。

(田村正資「クイズが人生と交錯するとき」による)

(注1) SE……サウンドエフェクトの略称。効果音のこと。

(注2) 『平成教育委員会』……一九九〇年代にテレビで放映されていたクイズ番組。「先生」役の北野武(ビートたけし)の指導のもと、タレントたちが「生徒」として、小・中学生レベルの問題を悪戦苦闘しながら解いて答え合わせをする。「国語」「算数」「理科」「社会」などの科目別にクイズは進行し、始業・終業時にはチャイムが鳴るなど、「学校」をモチーフにした演出が行われていた。

(注3) 『Qさま!!』……二〇〇四年からテレビで放映されているクイズ番組。制服を着たタレントたちが、主に小中学校レベルの問題を制限時間内に解いていく。「プレッシャーSTUDY」や、点数順に並べ替えることでタレントたちの学力を可視化する「学力王N.O.1決定戦」などの企画で人気を博してきた。

(注4) 文化資本……社会的地位を構成する個人の非物質的な資本のこと。具体的には、普段の言葉遣いや立ち振る舞いから、趣味や文化的素養、学歴や資格などの制度化された教育的・文化的な経験の蓄積を指す。フランスの社会学者ピエール・ブルデュー(一九三〇～二〇二二年)によって提唱された。

問一 傍線部(ア)～(カ)のカタカナで表記された語句と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解
答番号は 1 6。

(ア) ヤドる

1

- ① シユクシユクと事を進める
- ② 女性にテイシユクを求めるな
- ③ 心からのシユクイを表す
- ④ 言論をイシユクさせる
- ⑤ 旅館にトウシユクする

(イ) ボットウ

2

- ① 城にウチ入りを果たす
- ② 天下をスベる野望を抱く
- ③ ズツウがおさまらない
- ④ 財布をヌスマれる
- ⑤ 残業テアテを要求する

(ウ) テンボウ

3

- ① 版画のコテンを開く
- ② ベッテンの資料を読む
- ③ 教会のテンレイに参加する
- ④ 異世界にテンセイする
- ⑤ 文章にボウテンを打つ

(エ) アットウ

4

- ① トウイ即妙の答弁を行う
- ② 俳句をゼットウに千転する
- ③ 家具のテントウを防ぐ
- ④ 見解のトウイツを凶る
- ⑤ 名字タイトウを許される

(オ) センエイ

5

- ① エイジ八法を練習する
- ② ユウエイを禁止にする
- ③ エイコ盛衰は世の常である
- ④ シュエイに鍵を返却する
- ⑤ 流行にエイビンであり続ける

(カ) シヒヨウ

6

- ① 敵のシカクを追い払う
- ② 少年よタイシを抱け
- ③ シジヨウを挟まず判断する
- ④ 合格のためのシキンセキ
- ⑤ 犯人とシモンが一致する

問二 二重傍線部 (a) (c) の語句の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は

7) 9 。

(a) 造詣が深い

- ① 一心不乱に打ち込んでいる
- ② 豊富な知識や理解がある
- ③ 愛情と誇りを持っている
- ④ 長きにわたって親しんでいる
- ⑤ 深い関心や興味を寄せている

7

(b) 森羅万象

- ① 客観的に説明できるすべての現象
- ② 自然に関係するすべてのもの
- ③ 宇宙に存在するすべてのもの
- ④ 目に見えるすべての現象
- ⑤ 人間の感情や思考に関するすべてのこと

8

(c) 陰に陽に

- ① あるときは陰気に、あるときは陽気に
- ② あるときはひそかに、あるときは公然と
- ③ あるときは真面目に、あるときは愉快に
- ④ あるときは否定的に、あるときは肯定的に
- ⑤ あるときはひとりで、あるときは集団で

9

問三 空欄 A・B にあてはまる語として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は

10 . 11。

A

10

- ① 通信簿
- ② 転換点
- ③ 登竜門
- ④ 金字塔
- ⑤ 決勝戦

B

11

- ① 倫理
- ② 個人
- ③ 主観
- ④ 内面
- ⑤ 客観

問四 傍線部(1)「クイズと人生についてのひとつの立場」とあるが、どのような立場か。その説明として最も適切なものを、次の中から一

つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 12。

- ① どのような人生を送るのであれ、クイズは自分に何か大事なものを喪失させることを要求すると考える立場。
- ② クイズに正解するには努力だけでは不十分なため、自分の人生を肯定しつづけなければならぬと考える立場。
- ③ どのような人生を送るのであれ、クイズは自分の人生を正しいものであると認め、励ましてくれると考える立場。
- ④ クイズに正解するには努力だけでは不十分なため、人生の中でさまざまな経験を積むことが必要だと考える立場。
- ⑤ どのような人生を送るのであれ、クイズに正解するためには、努力では得られない運が必要だと考える立場。

問五 傍線部(2)「孤独な日々への祝福のように響きわたった」とあるが、そのように感じられたのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 13。

- ① 今まで話せる友人がいなかったのに、まるで天啓のように、仲間と呼べる人間に出会えたから。
- ② 太宰治という孤独な作家を好んで読んでいたおかげで、誰よりも早くクイズに答えることができたから。
- ③ 読書をしてきたことよって、人生で初めて他者から肯定されるという経験を得ることができたから。
- ④ ひとりて本を読むことが好きだったおかげで、実は自分にクイズの才能があることに気づけたから。
- ⑤ 黙々と行ってきた読書という個人的な営みへの報いのように、他者と繋がるという経験ができたから。

問六 破線で囲まれた空欄 には『君のクイズ』からの引用が入る。空欄に入る文章を次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 14。

- ① 作問者は「できることなら誰にも正解してほしくない」と思っている。正解の「ピンポン」という音は、解答者を肯定する一方で、出題者を否定する音なのだ。解答者の世界と、出題者の世界が離反することで、クイズが成立する。その瞬間こそがクイズの醍醐味だ。
- ② 作問者は「この問題が人生を変えるきっかけになってほしい」と思っている。正解の「ピンポン」という音は、解答者から、出題者に向けたエールの音なのだ。解答者の世界と、出題者の世界が出会って、答えがひとつに確定する。それこそがクイズの醍醐味だ。
- ③ 作問者は「できることなら誰かに正解してほしい」と思っている。正解の「ピンポン」という音は、解答者だけでなく、出題者も肯定する音なのだ。解答者の世界と、出題者の世界が重なりあって、答えがひとつに確定する。それこそがクイズの醍醐味だ。
- ④ 作問者は「この問題は絶対に解けないだろう」と思っている。正解の「ピンポン」という音は、解答者に勝利を、そして出題者に敗北を告げる音なのだ。解答者の世界と、出題者の世界がぶつかり合うことで、クイズが成立する。その闘争こそがクイズの醍醐味だ。
- ⑤ 作問者は「できることなら自分も解答したい」と思っている。正解の「ピンポン」という音は、出題者にとって、自分の代わりに解答してくれた解答者を祝福する音なのだ。解答者と出題者が見えないところで交流する。それこそがクイズの醍醐味だ。

問七 傍線部(3)「クイズ番組が『学校』というモチーフを強調している」のはなぜだと考えられるか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① 特定のジャンルのマニアックな知識を問うカルトクイズとは対照的に、世間一般の人々を視聴者とする多くのクイズ番組においては、実際に小中学校で習うような一般性の高い問題が出題されるため、解答者は「生徒」としての役割を担うことになっているから。
- ② 世間一般の人々を視聴者とする多くのクイズ番組においては、チャイムの使用や制服着用のような「学校」のモチーフによって、視聴者が解答者の目線でクイズを楽しめるように、解答者を基礎教養が試される「生徒」として位置づけなければならないから。
- ③ 世間一般から評価されるような公共的な知の領域から問題が出題される多くのクイズ番組においては、チャイムの使用や制服着用のような「学校」のモチーフによって、顔の見えない出題者の重要な役割を暗示し、番組を公共的な次元に固定することができるから。
- ④ 知っておくべき一般性の高い問題が出題される多くのクイズ番組では、チャイムの使用や制服着用のような「学校」のモチーフによって、解答者を基礎教養が試される「生徒」として位置づけると同時に、出題者が「教育者」のように公共的な知を担うと暗示できるから。
- ⑤ 公共の電波を使って放映される多くのクイズ番組においては、チャイムの使用や制服着用のような「学校」のモチーフによって、クイズに出題される知が公共的なものであると同時に、クイズ番組自体の公共性の高さをわかりやすく示すことができるから。

問八 傍線部(4)「ネガティブな面も存在する」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 16。

- ① 一般にクイズは正解可能な公共的な知の領域から作られるが、それは日常生活や人生経験とも密接に関連しているため、正解できるかどうか、学歴や家庭環境などへの間接的な評価となり、格差をあらわにすること。
- ② 一般にクイズは解答者の人生に踏み込み、正解することによって自身の過去を救済することを可能にするが、それはある解答者が正解することによって、他の解答者たちが救済される機会を奪い取るという一面をもつということ。
- ③ 一般にクイズは解答者の人生を肯定する快楽として機能する娯楽だが、それが競争である限りにおいて、必ず敗者を生み出す構造をもっているため、正解することが間接的に他者に対する優越となってしまうということ。
- ④ 一般にクイズは正解と不正解、勝ちと負けを弁別する分断的な要素をもつことにより、暴力性を楽しむ娯楽となっているため、正解者には自己肯定感を与える一方、不正解者は劣等感に苛さいなまれつづけるということ。
- ⑤ 一般にクイズの題材は時事的な話題や基礎教養的な知識から作られるが、解答者には瞬発力やひらめきも要求されるため、正解できるかどうか、頭の回転の速さの評価へと間接的にすり替わってしまうということ。

問九 傍線部(5)「伊沢拓司が、アメリカやヨーロッパで同様の活躍をすることは難しい」のはなぜだと考えられるか。その理由として最も適切なものを一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 17。

- ① クイズ業界には、フットボールなどのスポーツの世界とは違って、日本と海外とで交流可能なプロリーグが存在しないため、レベルや戦術が異なるという問題以前に、いまだ日本のクイズ王が海外で活躍する十分な環境が整っているとは言いがたいから。
- ② クイズ番組に出演する解答者の知名度や面白さには、共同体に特有のバイアスが存在するため、アメリカやヨーロッパに日本と同じような形式のクイズ番組があったとしても、現地で無名の伊沢が番組で活躍して人気者になるには時間がかかると考えられるから。
- ③ クイズは分断的な要素をもち、悦びの裏に暴力性を含んでいるという伊沢の指摘は、日本という文化圏に特有のバイアスであるため、アメリカやヨーロッパに日本と同じような形式のクイズ番組があったとしても、到底受け入れられないと考えられるから。
- ④ クイズに強い物知りが評価されるのは、甚だしく日本に相対的な文化現象であるため、アメリカやヨーロッパに日本と同じような形式のクイズ番組があったとしても、関心をもつ人は限られていて、社会的な認知を獲得することは困難であると考えられるから。
- ⑤ クイズに出題される公的な知は、共同体の文化や歴史を背景にして決定される相対的な枠組みであるため、アメリカやヨーロッパに日本と同じような形式のクイズ番組があったとしても、伊沢が共有できていない知の枠組みが存在していると考えられるから。

問十 傍線部(6)「江藤はひとつひとつの出来事の価値を見極めて遠近法的に位置づけるための焦点を見つけ出さねばならなかった」とあるが、アメリカ滞在中の江藤淳にとって「焦点」の発見が必要だったのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 18。

- ① 日本国内で学べる英米の文学や社会についての知識はリアルタイムのものではなかったために、江藤はアメリカ国内における政治・社会の最新の情報を十分に理解しておらず、時代遅れの自分が場違いであるように感じていたから。
- ② 日本国内における英米の文学や社会の知識の獲得が未熟であったがために、江藤はアメリカ国内において知識人たちがどのような理由から知識に価値や重要性を与えているかを十分に理解できず、自分の至らなさを痛感していたから。
- ③ 日本国内における英米の文学や社会についての知識には庶民の視点が欠けていたために、江藤はアメリカ国内で生活する一般人にとって文学や文化がどのような価値や魅力をもっているかを十分に理解できず、葛藤していたから。
- ④ 日本国内における英米の文学や社会についての知識の価値体系はアメリカ国内のそれと根本において異なっていたために、江藤は滞在中の生活のなかで出会う知識の魅力や重要性を十分に理解できず、戸惑いを感じていたから。
- ⑤ 日本国内における英米の文学や社会についての知識は体系的であったが、アメリカ国内の生活のなかで出会う情報があまりに多く、体系性を欠いていたため、江藤は自身の知識の価値づけの方向性を見失って途方に暮れていたから。

問十一 本文の主旨に照らして、今あなたが解いている入学試験が「クイズ」とは異なるのは、どのような点にあると考えられるか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 19。

- ① クイズは、出題者が魅力的で面白い「公共的な知」を求めて作成した問題を正解できたとき、知の「焦点」が重なった解答者が、自分の人生が肯定されて悦びを感じることでできる形式である一方で、社会との断絶までも可視化するのに対し、この入試問題では生活する人々の思想や価値観に根ざしたような知の「焦点」は入念に排除して作られているという点。
- ② クイズは、出題者が共同体の言語・歴史・文化などを背景とした「公共的な知」を問うことで、正解した解答者が共同体の構成員として認められ、人生が肯定されて悦びを感じることでできる形式であるのに対し、この入試問題はあらゆる受験生に機会が開かれており、特定の文化圏に依存した「焦点」をもたない、世界的で普遍的な知を問うているという点。
- ③ クイズは、出題者が発見した魅力的で面白い「公共的な知」が解答者と共有されたとき、知の「焦点」が重なった解答者が、自分の人生が肯定されて悦びを感じることでできる形式である一方で、誰かの人生を否定する暴力性を含んでいるのに対し、この入試問題では競争における暴力性を排除するために、知の「焦点」の共有は不可視化されているという点。
- ④ クイズは、出題者が発見した魅力的で面白い「公共的な知」が解答者と共有されたとき、知の「焦点」が重なった解答者が、自分の人生が肯定されて悦びを感じることでできる形式であるのに対し、この入試問題の「公共的な知」は出題範囲内の知識や考え方であり、したがって出題者と解答者のあいだで知の合意形成や「焦点」の共有はあらかじめ行われているという点。
- ⑤ クイズは、出題者が魅力的で面白い「公共的な知」を求めて作成した問題を正解できたとき、知の「焦点」が重なった解答者が、自分の人生が肯定されて悦びを感じることでできる形式であるのに対し、この入試問題は一問ずつの正解ではなく、総合点による合格をつかんで初めていわば「正解」のランプが灯り、人生が肯定されることになるという点。

問十二 波線部「太宰治」の作品には該当しないものを一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 『人間失格』
- ② 『斜陽』
- ③ 『ヴィヨンの妻』
- ④ 『明暗』
- ⑤ 『走れメロス』

〔選択問題〕〈現代文〉か〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕〈現代文〉

次の文章は小川剛生『武士はなぜ歌を詠むか』の一節である。文章は、中世の歴史書である『吾妻鏡』文治二年（一一八六）八月十五日条に見える、源頼朝と西行法師との鶴岡八幡宮での対話を紹介するところから始まる。これを読み、後の問いに答えなさい。

頼朝は四十歳、前年平家を滅ぼし、天下を併呑する勢いを誇っていた。対する西行は六十九歳、文中にあるように遁世を遂げて既に五十年、一介の老僧の語がふさわしい。しかし頼朝は異様なほどに鄭重であった。自邸に招いて歓待し、熱心に「歌道」と「弓馬の事」を西行に尋ねた。しきりにその任でないと固辞する西行であったが、頼朝の熱意に負けて詳しく語り始め、頼朝は右筆をして記録せしめた。

頼朝の質した「歌道」の、具体的な内容は何であろうか。西行はこれについては遂に口を開かず、ただ「詠歌は、花月に対して動感の折節、僅かに三十一字を作るばかり」と答えたのみであるが、頼朝が知りたかったのは、おそらくこういう文学的テクニクではありえない。

これを頼朝の発したもう一つの質問、「弓馬の事」から考えたい。これは後で出る「秀郷朝臣以来、九代嫡家相承の兵法」と同じものである。藤原秀郷と言えば平将門を討った下野国の猛将、騎射の芸に神通した伝説により後世仰がれる。その末裔を称する者は、奥州藤原氏をはじめ、小山・結城・後藤など頼朝麾下にもすこぶる多い。

秀郷の嫡流で紀伊国田仲荘（和歌山県紀の川市）に居住し、都では院や摂関家に仕えて左衛門尉に任じたのが西行の出た佐藤氏である。西行も出家以前は鳥羽院の北面の武士であった。主君の警衛のほか、院の主催する祭礼での流鏑馬行事に奉仕することもその重要な職務であった。流鏑馬・笠懸は実戦に用いられる騎射の技の一つであるが、神事における作法として様式化された。その知識はこの芸を奉仕する家が伝え、他人に教授できるとするのが当時の思考であった。

近年、日本史学では「武士」像の見直しが進んでいる。「武士」とは単に殺人や戦闘の術を専らにした武装集団の謂ではなく、騎射の芸に代表される「武芸」を伝える者である、という。そして「武芸」は宮廷文化に属する芸能の一つであり、西国に滅んだ平家の武者こそ実は「武士」の名にふさわしい。頼朝はこの頃しきりに京都の文物を取り入れているが、それは粗暴な東国の領主たちを教育し「武士」へと引き上げる必要に迫られていたためである。日頃崇敬する鶴岡八幡宮の放生会を政権の重要な儀礼として整備しようとしていたのもその一環である（祭礼当日に西行に邂逅したのは、果たして偶然であろうか）。実際、西行の伝えた騎射の作法は頼朝によって正説とされ、半世紀後の放生会でも参照されている（吾妻鏡嘉禎三年七月十九日条）。かつ、頼朝が秀郷流の秘伝を知ることが、秀郷を祖と仰ぐ北関東の領主を帰服させる効果も伴った筈である。

以上のような頼朝の武芸に対する姿勢は、歌道の場合も同様であったと考えられる。実際、西行のみならず、源頼政や平忠盛のように、北面の武士には、歌人として名をなした者が少なくない。院御所ではおのずと和歌を詠む機会があり、「武士」には歌道も必要な教養であった。

(3) 和歌を創作し鑑賞するという文学行為は、個人のうちで完結しない。歌人は、文学観はもちろんであるが、政治的信条や立場を同じくするグループに所属し詠歌した（これが歌壇の最小単位である）。そして題を得る、構想を練る、添削を受ける、料紙に記す、作品を読み上げる、といった一連の行為は、すべて一定の作法故実、そのグループで通用するルールにのっとったものであった。

しかも作品が公開・発表される場の営み、つまり歌会・歌合うたあわせは、程度の差はあるにしても、共同体の構成員である自覚の下になされる、厳格な儀礼である。文字として遺のこった和歌はおおかた題詠歌であることになる。そのために中世和歌と言えば、誰もが似たような表現でひたすら同じテーマを詠むだけの退屈な文学、というのが決まり文句であるが、和歌とは、古今・後撰ごせん・拾遺の三代集によって選り取られた素材と詠法を基盤とし、その枠内で見出みい出した少量の美を、やはり王朝時代の雅語によって表現するものだから、すぐにそれとわかる個性などむしろあつてはならないのである。敢あえて言えば、決まった筋書きのもとに演じられる神事や芸能に近い。本書の記述は和歌の表現そのものよりも歌人や歌壇に焦点を当ててはいるが、そのことは銘記しておきたい。

もちろんポエムとして見れば、巧拙はおのずと知られたであろう。また個人的な経験に触発された歌、いわゆる藝げの歌が排除されたわけではなかった。しかし、歌壇と無縁な場所で秀歌をものしたところで、少なくとも社会的評価には結びつかなかった。古典和歌の世界では歌壇と全く縁を持たない、もぐりの歌人は存在しない、といってもよい。西行は野僧であるが、晩年にも都の歌壇との交渉をしきりに持っていた。

とりわけ、この時代は、歌会の作法が急速に整備された時期であった。袋草紙ふくろくさじ・八雲御抄やくもみしやうといった歌論書は、表現技法についての教えと同じくらい、歌会故実の記述に紙数を割いている。朝廷で儀式を遂行する時のように、次第（プログラム）を作成し、懐中にしのばせることも行われた。藤原定家には「和歌会次第」という歌会作法を記した著作があつて、現在でこそ知名度は低い、後世には歌会開催の準拠とされ、おそらく定家著作中、最も流布している。

こうした手続きを踏ふんで和歌を詠むことは、洗練された、文化的な振る舞いを身につけることでもあった。歌人であることが、社会的なステイタスとなった所以である。そしてこれが専門家の指導なくしては体得も再現もできないこと、実は「弓馬の事」と全く同じである。頼朝が西行に尋ねたかった「歌道」の内容とはまず、このようなものであった。

頼朝自身はすぐれた歌才の持ち主であった。側近と詠み交わした和歌が吾妻鏡に記録されている。いずれも場の緊張を和らげたり、相手の機知を試したりした即興の詠である。家臣との人間的紐帯ちゆうたいを強めるために、あるいは京都の要人との交渉にも、頼朝は和歌の力をよく利用したようである。

建久六年（一一九五）三月、頼朝は、東大寺落慶供養に参列するために上洛じやうらくし、三ヶ月ほど在京した。この間京都の要人とも面会する機会

を持ち、ことに天台座主の慈円と交歓を重ねた。慈円の家集拾玉集には、頼朝との贈答歌が載せられ、その数は七十七首に上る。しかし慈円は宗教界第一の大立者、たんなる風雅の交わりではあり得ない。頼朝は流動的な都の政情を聞き出したかったであろうし、また慈円の側は延暦寺莊園の保護のために頼朝の協力を取りつける必要があった。際限ない挨拶、追従、あてこすり、腹の探り合い……。しきりに「京にすまはれんこそ世のためもよからめ」とささやく慈円が、常陸と陸奥の境に置かれたという勿来の関に寄せて、

(注5) あづまぢのかたに勿来の関の名は君を都にすめとなりけり

と詠みかければ、頼朝は、

(注6) みやこには君にあふ坂ちかければ勿来の関は遠きとを知れ

といなす。「歌のよきよし」を誉めれば、

(注7) 五月雨のたえまがちなる雲のあひを空ほめをする人にぞありける

ととほける。これにはみずから即詠多詠の才人をもつて任じた慈円も舌を巻く。

その後、源氏将軍から摂家将軍、ついで親王将軍へと、将軍が実権を喪失していくにつれて、このような生々しい人間関係に基づいた和歌活動は次第に影をひそめていくが、全く途絶えることはなかった。

将軍権力は、異なった性格の支配権を發揮する、という有名な学説がある(佐藤進一『日本中世史論集』)。法律・行政など制度の裏付けを持った統治権の支配権と、人間関係に基づく主従制的支配権である。コインの表裏のように単純に分けられるわけではないし、一方が衰頹すれば一方が強化される、という関係でもないが、武家政治の本質を言い当てたものとして、中世史研究にきわめて大きな影響を与えたことは周知の通りである。

ところで、この二つの支配権が働きかける世界は、それぞれ、和歌で言う「晴」と「曇」に当たっている。和歌好みの権力者が歌人社会に君臨するとき、歌会で作法にのっとって披講される「晴」の和歌は、主催者の治世を祝言するものであるから、その支配に寄与する影響は観念的とはいえ広く深い。一方、一種のコミュニケーションである「曇」の和歌は、主従関係に直接作用しこれを強化する働きを持つが影響は一時的限定的であろう。そして、中世和歌においてより重要であるのは、恐らく現実の権力の場合と同様に、前者が持つ効力である。中世の勅撰和歌集などは政教的性格を強めており、その成立は時の政権の統治権的支配の実績の一つに数えてよい。

もつとも、頼朝が政務を執っていた時期の鎌倉で、正式な歌会が催されたことは確認できない。唯一、元暦元年(一一八四)四月四日、鎌倉に滞在していた公家の一条能保や平時家とともに自邸の花を愛でて「管絃詠歌の儀」があったという吾妻鏡の記事が目につくくらいである(能保や時家のように和歌が詠まれる手続きを知っていた人びとがその場にいたことによるのであろう)。

頼朝の跡を継いだ頼家は蹴鞠を好んだが、和歌事蹟は一切伝えられていない。三代将軍実朝の代になり、建永元年(一二〇六)二月四日、叔

父北条義時の山莊へ雪見に出向き、「和歌御会」があつた。北条泰時・東重胤・内藤知親(注9)がその場に祇候したという。このとき実朝は十五歳。一応成人とみなされる年齢である。これは晴の会ではなかつたが、さらに四年を経た承元四年(一一二〇)九月十三日と十一月二十一日の両度、將軍邸において源親広・知親・重胤・和田朝盛が参仕して会が開かれた。これが鎌倉幕府における和歌会の初見である。御家人の間にも和歌に堪能な者が現れて実朝に近侍したことが知られる。

その頃には新古今集の撰者に抜擢された飛鳥井雅経が、忙しく京都鎌倉の間を往復していたし、源氏物語の研究で知られる源光行も幕府御家人となつて鎌倉に定住していた。また鴨長明も翌年に下向して実朝に面会する、といった具合に、京都との人的な交流も頼朝の時代に比較してずっと盛んになつていた。歌壇の成立する条件が整いつつあつた。

さて、実朝の和歌好みはおよそ武士に非ざる文弱(注10)であるとされる。ただし、和歌を好んだために人心が離反した、というのは作り話である。下野の御家人長沼宗政が「当代は歌鞠をもつて業となし、武芸すた廢るるに似たり、女性をもつて宗となし、勇士これ無きが如し」と実朝を批判した事件がよく引かれるが(吾妻鏡建保元年九月二十六日条)、武芸と歌鞠とは等しく重視されこそすれ、相反するものではなかつた。この放言、「歌道に携はるの輩」を引き連れて、優雅な野歩きをしており、そのことが殺氣立つた宗政の憤懣を誘つたと分る。ただし、当時の御家人は複数のグループ(番)に編制されて交替で將軍に祇候したのであるが、武芸のほか、歌・鞠・管絃・書道といった技芸をもつた人物が選拔された。宗政の怒りにもかかわらず、和歌が詠めなくてはもはや御所勤めは叶わなかつた。

歌人の最大の名誉は、自詠が勅撰和歌集に収められることであつた。和歌がこれほどまでに高い權威を持ったのは、勅撰集によつて担保されていたからと言つてもよい。

ところが、平安時代の勅撰集の編纂は、公家の日記や史書で話題となることは案外少なく、いかなる経緯で成立したのかよく分からない集が多い。ある個人が私に撰んだ歌集(私撰集)が進覧され、それから勅撰というお墨付きを貰うことも多かつたのである。

治天の君(院政をとる上皇、法皇、稀に親政時の天皇)の命令によつて、時の歌壇の指導者が撰者に指名され、歌を公募して撰集にあたる、という手続きが踐まれるのは、十三代集と呼び慣わされる鎌倉時代以降の勅撰集においてである。

その劃期は文治四年(一一八八)、後白河院の院宣をうけて成立した千載集である。勅撰集とは文章経国思想の影響下、為政者の頌歌、平和な治世のあかしとして編まれるものであるが、このような政教的性格が色濃くなるのも中世である。撰者藤原俊成が謀叛人である平忠度の詠を入集させるか悩んだのは、政治と文学の相克をあらわすエピソードであるが、こうした配慮こそ、撰者の力量の見せ所であつた。撰者のもとにはさまざまなコネを利用して入集希望が殺到するが、撰者はみずからの歌観に忠実ならんとしつつも、治天の君からの請け負つた仕事であることを忘れず編纂を進めることになる。優れた撰者の鑑識眼にかかれれば、たとえ平凡な和歌でも、本来詠まれた状況とは違つた役割を帯び、排列

の妙によって新たな生命を与えられることもしばしばであった。(中略)

勅撰集には政治に対する配慮が必要であった。時代が降り、国政に占める武家政権の割合が重くなるほど、入集する武家歌人の数は増加する。これは公家の武家に対する阿諛(注14)もあるが、事実上国政を担っている以上は、勅撰集に採られて当然である、という論理が撰者の側に働いていたと見るべきであろう。鎌倉時代の勅撰集は、入集数の上でも、北条氏を五撰家(注15)とほぼ同等に遇しているとの興味深い指摘もあり、武家歌人を包み込んだ勅撰集は、当時の政治秩序の鳥瞰図(ちようかん)と見ることもできる(前田雅之「日本意識の表象」)。

和歌はあくまでそれ自体独立した文学作品として鑑賞すべきという立場がある。作品を読むことを放棄せず、表現の秘密を探る手段を尽くすべきであることは言うまでもない。しかし、和歌の詠み出された場や状況を、歴史学の方法によって正確に復原していくのも作品の読解に欠かせない手続きであり、これはどれほど厳密を期そうとも際限ない。

権力者の意向や社会の構造が直接文学に影響するから、ともいえるが、もともと政界と歌壇とは同心円を描き重なり合っている。時の権力の性格が可視的な形をとって現れるのが歌壇であり、そこでは和歌のさまざまな約束事が、権力の形相を規定することがある。

歌人たちの社会、歌壇に着目することは、単に文学研究のみならず、広く中世社会の権力構造を分析するのにも有効な手だてである。それまで公家社会のうちにしか歌壇は確認されなかったが、中世には武家社会にも形成され、かつ京都にしか存在しなかったものが、鎌倉に、さらには地方各地にも生じてくる。これら複数の小歌壇同士の交流や対立も、その背景となった権力間のバランスと連動している場合がある。

とはいえ鎌倉の地が歌壇と呼びうるサークルを擁し、見るに足る成果を生み出すまでには、数十年の時間が必要であった。実朝でさえ、一種の突然変異というべきものであった。

ある社会での歌壇活動の質は、その政治的・文化的な習熟度に左右される。具体的には上に立つ首長の熱意、また歌人層の厚さ、何より優れた指導者の存在が不可欠であった。これらの条件が関東で整ったのは、三代で終わった源氏将軍、さらに二代の撰家将軍を経た、六代目の将軍宗尊親王の治世であった。

(小川剛生『武士はなぜ歌を詠むか』による。小見出しと注記など本文の一部を省略した)

(注1) 文中にあるように……原文では、右に引用した部分の直前に『吾妻鏡』文治二年八月十五日条の記事が引用されている。

(注2) 嫡家相承……正統の血筋をひいた家柄の者が代々受け継ぐこと。

(注3) 題詠歌……あらかじめ決められた題で詠まれる和歌。

(注4) 家集……個人の詠歌を集めた歌集。私家集。

(注5) 「あづまぢの」の歌……あなた(頼朝)は東国ではなく都に住めばよいという意。

(注6) 「みやこには」の歌……都にいればあなた(慈円)に会うのに近く、「来るな」という名を持つ勿来の関とは遠く隔たっているという意。慈円が「あづまぢの」の歌に込めた意図に正面からは取り合わず、はぐらかす内容になっている。

(注7) 「五月雨の」の歌……あなた(慈円)は「空褒め(お世辞)」をする人だという意。よい歌だと褒める慈円に、頼朝は謙遜の言葉で返してとぼけて見せ、心底を明かさない。

(注8) 披講……歌会で、詠歌を読み上げること。

(注9) 祇候……側近く仕えること。

(注10) 文弱……文学や学問、芸術に関することばかりふけて弱々しいこと。

(注11) 御所勤め……ここでは、將軍に側近く仕えること。

(注12) 文章経国思想……文学・学問は国を治める上で極めて重要事であるとする思想。

(注13) 頌歌……人の功德・功績などを褒め称^なえて歌うこと。

(注14) 阿諛……相手の気に入るようなことを言ったり、そのような態度をとったりすること。

(注15) 五撰家……鎌倉時代以降、藤原氏のうちで撰政・関白に任じられる五つの家柄で、近衛^{このゑ}・九条・二条・一条・鷹司^{たかつき}の五家をいう。

問一 傍線部(1)「熱心に『歌道』と『弓馬の事』を西行に尋ねた」とあるが、ここで源頼朝が西行に尋ねた「歌道」とはどのようなことであつたと筆者は考えているか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 21。

- ① 花鳥風月に代表される風流な景物に心を動かされた折節に、その感動をどのようにして三十一文字に託して表現するのかということ。
- ② 和歌は本来神に奉納するために詠まれるものだが、そのように和歌を神に捧げる際の儀礼として様式化された作法のこと。
- ③ 粗暴な東国の領主たちを「武士」へと引き上げるために、どのようにして京都の文物を取り入れていけばよいのかということ。
- ④ 政治的信条や立場、文学観などを同じくする歌壇の一員として和歌を詠む際の洗練された文化的な振る舞い方のこと。
- ⑤ 藤原秀郷を祖と仰ぐ北関東の領主を従わせるために、どのようにして秀郷流の騎射の芸と作法を伝えていけばよいかということ。

問二 傍線部(2)「近年、日本史学では『武士』像の見直しが進んでいる。」とあるが、「武士」像はどのように見直されたのか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 22。

- ① 平将門を討伐した下野国の猛将藤原秀郷の末裔として、都で上皇や摂関家に仕え、その戦闘力によって主君を警護した者たちが武士である。
- ② 単に殺人や戦闘術に優れた武装集団を言うのではなく、祭礼での流鏝馬や笠懸などの行事の作法に通じていて、上皇が主催するそれらの神事に奉仕できる者たちがこそが武士である。
- ③ 和歌を詠むことなどは文弱な振る舞いだと拒絶し、ひたすら騎射の芸に代表される武芸を身につけ、腕を磨き、それを他人にも伝授することのできる者こそが武士である。
- ④ 武勇に優れるだけでなく、当時信仰を集めた鶴岡八幡宮の放生会を、世を統治するための重要な儀礼として整備するだけの知恵や政治力を兼ね備えた者こそが武士である。
- ⑤ 単に殺人や戦闘術に優れた武装集団を言うのではなく、宮廷文化に属する芸能の一つとしての武芸を受け伝え、教養として歌道などの技芸も身につけた者こそが武士である。

問三 傍線部(3)「和歌を創作し鑑賞するという文学行為」とはどのような行為か。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 23。

- ① 花鳥風月に代表される風流な景物に心を動かされたときに、その感動を、様々なレトリックを駆使しながら、王朝時代以来の洗練された雅語によって表現し、鑑賞しようとする行為。
- ② 題を得て構想を立て、和歌を作り、添削を受け、料紙に記し、読み上げて披露するに至るまでの一連の行為を、文学観や政治的信条を共有する歌壇の一員という自覚のもとで、厳格な儀礼として行う行為。
- ③ 『古今集』『後撰集』『拾遺集』の三代集によって選り取られた素材と詠法を基盤として、誰もが似たような表現でひたすら同じテーマを詠み、享受を続けていく行為。
- ④ 一人一人の個性によるのではなく、和歌の神による天啓を得て初めて和歌を詠むことも受け取ることも可能となるような、神事や芸能に近い神秘的な体験として行われる行為。
- ⑤ 歌壇や社会とは切り離された場で個人的な経験に触発されて生じた心情や自己の内面を、五七五七七という定型によって表現した和歌を、自立した作品として鑑賞する行為。

問四 傍線部(4)「和歌の力」を筆者はどのように考えているか。その説明として適切なものを、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。
ただし、解答順は問わない。解答番号は 24 ・ 25 。

- ① 和歌は、その贈答が宮廷文化に属する技芸の一つを身につけた者同士の風雅の交わりとなり、またそのことによって武家と公家との交流を円滑にする働きを持つ。
- ② 和歌は、『古今集』『後撰集』『拾遺集』の三代集で選り取られた素材と詠法、美意識を基盤とし、王朝時代の雅語によって詠まれるものであり、贈答する相手の文字の素養を試す働きを持つ。
- ③ 和歌は、際限ない挨拶や追従、あてこすり、腹の探り合いなどが続く当時の政治状況や人間関係の中で、絶えず緊張を強いられた人々の心をしばし和らげる働きを持つ。
- ④ 和歌は、優れたコミュニケーション手段として人と人を結びつけ、立場を異にする者のあいだで情報を交換したり、相手に協力を求めたりするのを助ける働きを持つ。
- ⑤ 和歌は、和歌好みの権力者が歌人社会に君臨するとき、歌会で作法に則^{のっと}って詠まれる「晴」の歌がその治世を祝うものとなることで、権力者の統治権的支配を観念的に強化する働きを持つ。
- ⑥ 和歌は、一種のコミュニケーションとして場の雰囲気や和らげたり、主従関係に直接作用して結びつきを強固にして、主従制的支配の関係を強化したりする働きを持つ。

問五 傍線部(5)「治天の君からの請け負った仕事であることを忘れず編纂を進めることになる」とあるが、勅撰集の撰者が「治天の君からの請け負った仕事であることを忘れず編纂を進める」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 26。

- ① 勅撰集の編纂は為政者が善政を行う平和な世の証しとしてなされる政教的性格が色濃いためであることを前提とし、朝廷と武家政権との関係性など同時代の政治状況に対する配慮も撰者には必要だということ。
- ② 勅撰集の撰者に選ばれるということが大変な名誉だということを忘れず、同時代の政治状況や人間関係などには左右されずに、あくまで自立した文学作品としての優劣という観点だけで入集する歌を選ぶ覚悟が撰者には必要だということ。
- ③ 自分の和歌が勅撰集に選ばれることが歌人にとって最大の名誉であることを忘れず、撰者はその優れた鑑識眼によって、たとえ一首単独では平凡な和歌であっても排列の妙によって新たな生命を吹き込み、全体として優れた歌集を編纂する責任があるということ。
- ④ 優れた勅撰集を編纂する前提として、同時代の歌壇活動の質が高いことが求められるが、そのためには何よりも優れた歌道の指導者の存在が不可欠なので、撰者は勅撰集の編纂だけではなく、日頃から後進の歌人達の指導にも尽力する必要があるということ。
- ⑤ 武家の中にも歌人が多く現れ、かつては京都にしか存在しなかった歌壇が鎌倉をはじめ各地で形成されるようになったので、国家的事業として勅撰集を編纂する際、撰者は京都だけではなく各地の歌壇や歌人を視野に収めて入集する歌を選ぶ必要があるということ。

問六 本文の主旨として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 27。

- ① 「武士」は単に殺人や戦闘の術を専らにする武装集団を言うのではなく、神事での流鏑馬・笠懸行事の作法を身につけ、騎射の芸などの武芸を後進に伝えられる者こそが「武士」の名にふさわしいと認識を改める必要がある。
- ② 文治二年八月十五日、源頼朝が西行に「弓馬の事」と「歌道」を尋ねたことは偶然ではなく、当時頼朝が粗暴な東国の領主達を宮廷文化に属する様々な技芸や教養を身につけた「武士」へと引き上げようとしていたことを背景に、起きるべくして起きた出来事である。
- ③ 源頼朝は武士の頭領として優れていただけでなく、場の緊張を和らげたり、相手の機知を試したりするとき、また、家臣との主従関係の結びつきを強めたり、京都の要人と交渉を行うときなどに和歌の力を最大限に活用できる、すぐれた歌才の持ち主であった。
- ④ 中世に限らず、時の権力者の意向や政治状況、社会の構造などが直接間接に文学作品に影響を及ぼすことは避けられないが、それでもやはり和歌はあくまでそれ自体独立した作品として鑑賞されるべきであり、そのために表現の秘密を探る手段を尽くすべきである。
- ⑤ 和歌について研究する意義は、それ自体を独立した文学作品として鑑賞することだけにあるのではなく、歌人達の社会を同時代の権力構造が可視化されるものと考えてそこに着目することで、中世の社会や権力の構造を分析するのに有効な手段となることにもある。

〔二〕 〈古文〉 次の文章【甲】は、江戸時代の学者・僧侶である契沖けいちゅうによる随筆の一部である。この文章を読み、後の問いに答えなさい。

【甲】

いにしへの歌は、たとへば画師ゑしならぬ人の堪能けん能なるが、用ある時、物にまかせてかけるのごとし。

後の歌は、画師のかけるかのごとし。⁽¹⁾よけれども、心よりおこれるはまれなり。^(A)人のやとふにまかせて、草もゆるがず照る日に汗もしとどに

て冬の絵かかむに、見る人をさむからしめ、うづみ火のもとに衣えを八重にかさねきて夏(B)の絵かかむに、見る人涼しくおぼえむをば、上手といふべきがごとく、歌もそのたましひをこめたらむをばい(C)にしへの人につげりといふべし。

(『河社』による)

問一 傍線部 (A) ～ (C) の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は

30。

28

～

(A) 人のやとふにまかせて

- ① 他人があれこれと言うのに従って
- ② 周囲に嫌がられるのも無視をして
- ③ 誰かに雇われたことを口実にして
- ④ 雇ってくれた人物の意向に従って
- ⑤ 雇われている者に言い負かされて

28

(B) 衣を八重にかさねきて

- ① 衣冠を大量に抱えてやって来て
- ② 衣冠をくり返し整えさせながら
- ③ 着物を八重桜のように着飾って
- ④ 着物をたくさん重ねて着用して
- ⑤ 着物を何度もここへ持参しつつ

29

(C) いにしへの人につげり

- ① 昔の人に次ぐ程度になる
- ② 昔の人に告げたのだった
- ③ 昔の人の心を継いでいる
- ④ 歴史上の人が似せている
- ⑤ 歴史上の人が続いている

30

問二 傍線部(1)「よけれども」を品詞分解したものととして、最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 形容詞の連用形 + 係助詞
- ② 形容詞の已然形 + 接続助詞
- ③ 形容詞の連用形 + 断定の助動詞の連用形 + 接続助詞
- ④ 形容詞の連用形 + 推量の助動詞の連用形 + 係助詞
- ⑤ 形容詞の已然形 + 完了の助動詞の連用形 + 接続助詞

問三 【甲】の文章の内容に合致するものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 今の和歌にも昔の和歌にも巧みな作はあるが、今の和歌と昔の和歌とでは、作者の姿勢や心情と言葉との関係が異なっている。
- ② 優れた和歌には、日差しで汗だくになる夏の日に読んでも寒くなるような迫力があるが、今の和歌にはそのようなものはない。
- ③ 今は、夏の暑い日でも寒い冬の情景を詠むことができ、また冬でも夏の情景を詠むことができるような歌人が信頼されている。
- ④ 昔の人は、精魂を込めて詠んでこそ優れた和歌が生まれることを理解していたが、今の人は優れた和歌を評価する能力もない。
- ⑤ 今の和歌は画家志望の人が描いた絵のようなものだが、昔の和歌は画家を職業にしている人が描く絵のように高い価値がある。

問四 次の文章【乙】は、「学者」について述べた漢文とその解説である。二つの文章【甲】【乙】についての説明として最も適切なものを、後の選択肢の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 33。

【乙】

子曰、古之学者为己、今之学者为人。（『論語』）
（解説） 社会的名声を得ることのみを目標とする、見世物、パフォーマンスとしての『論語』が成立した。当時の学問を痛烈に批判した言葉である。
（井波律子『完訳 論語』による。「」内と返り点は出題者による）

- ① 【甲】は「いにしへ」を自分自身の真情で歌が詠まれていた理想的な時代として回顧し、【乙】は「古」を学問が学者の自己満足にとどまっていた未開の時代ととらえて否定的に評価している。
- ② 【甲】は「いにしへ」の画家や歌人が自分を厳しく鍛えて高度な技術を身に付けていたことを称賛し、【乙】は「古」の学問が仲間うちでしか通用しないものであったことを批判している。
- ③ 【甲】は「いにしへ」の和歌を自分の詠みたいことが真情で詠まれているものであるとして評価し、【乙】は「古」の学問が学者自身の修練として取り組まれていたことに理想を見出^{みいだ}している。
- ④ 【甲】は「いにしへ」の絵画や和歌における豊かな技法が多くの人々を感動させることを指摘し、【乙】は「古」の学問が世評よりも自分自身の探求心のために行われていた点に注意を促している。
- ⑤ 【甲】は「いにしへ」の和歌が詠み手自身の発心のために詠まれていたあり方を取り戻そうと主張し、【乙】は「古」の学問はそれを修める者の道徳性を高めるものであるべきだと述べている。

問五 この文章を書いた契沖は、江戸時代前期の人物である。この時期に書かれた作品の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 34。

- ① 『おくのほそ道』 ② 『金閣寺』 ③ 『太平記』 ④ 『竹取物語』 ⑤ 『南総里見八犬伝』